

幻想放浪記『居酒屋・
力自慢』

たいやき屋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生きる事、それ即ち他者を喰らい、その命を頂く事である。生きている限り、どんな者でも何か食べなければいきていけない。そして、どうせ食べるなら美味しい物を食いたい。

そんな事を考えているのは俺だけでは無いはずだ。

そこには人妖問わず沢山の客が来る。

日頃の疲れや不満を忘れるために、美味しい飯と酒を求めてやってくる。

そんな者達の事を考えながら今日も下準備を行い、

料理を振る舞う店主がいる。

赤い暖簾をくぐるといつでも大将が明るく出迎える。

「へいらっしやい！今日はなんにする?？」

目次

魔法の森一夜目	1
魔法の森二夜目	15
魔法の森三夜目	31
魔法の森四夜目	45
囚われの紅魔館一夜目	62

魔法の森一夜目

ここは幻想郷。

この国日本の何処かにあるらしい、

人々から忘れられた者の訪れる最後の楽園……

人間、妖怪、妖精、さらに神様までもがいるそんな世界。

これはそんな世界で暮らす一人の男の物語である。

時刻は夜の8時を過ぎたぐらいだろうか。ここは魔法の森。辺りは暗く、肉眼では数メートル先が僅かに見える。月明かりが足元を照らしており、かろうじて歩ける程度には明るい。しかし、魔法の森には妖怪がいる。太陽がでている明るい時間なら、妖怪などには負けたりはしない。

だが、夜になると話は別だ。奴らは人間より夜目が利く。それで背後から襲われてはひとたまりもない。無傷で勝つのは難しいだろう。万が一に備え、私は帽子の中から八

卦炉を取り出し、呪文を唱える。

八卦炉が光り出し、あたりを明るく照らし出す。太陽の光ほど明るくないが提灯や蠟燭より遙かに明るい。これだけ明るければ妖怪に襲われても反応することができだろう。

少し遅れたが、自己紹介をしようと思う。私の名前は霧雨魔理沙。見た目通りの魔法使いだ。魔法使い（物理）ではない。間違えないように。まあ、魔法使うより物理で攻める方が得意なのは事実だが。今日は博麗神社で宴会があつて今はその帰り。普段なら箒に乗って帰るんだけど、宴会の途中酔つ払つた霊夢がスイカ割りの棒の代わりに私の箒を使ったせいで、箒が真っ二つに折れてしまった。仕方ないので、魔法の森にある自宅まで歩いてる最中だ。

特に何事もなく帰路をたどっていると、森の奥少しひらけた場所に赤い何かが浮かんでいた。遠目ではぼんやりとしか見えなかったが、近くまで歩いていくにつれその赤い物の正体がわかった。どうやら屋台の提灯のようだった。

近づいていくと提灯には黒色の筆文字で「力自慢」と書かれている。外観は普通の屋台でのれんの下には丸椅子が5つ置かれているが、座ってるものはおらず客は誰も居な

いようだ。

確かに幻想郷ではたまに屋台は見ることもある。だが、基本的に見かける場所は人里や博麗神社付近、迷いの竹林の入り口など比較的人が生活している場所にしか来ない。こんな、夜に妖怪が出るかもしれない魔法の森で見かけるのは初めてだった。

私はこんな所にある屋台の物珍しさと霊夢に箒を折られた事もあり、少し愚痴を吐きたい気分だったのでその屋台に入り軽く一杯呑もうと思った。

吊るされている藍色の、のれんをくぐると目の前に店主らしき人物がいた。身長は高めで少し細身のお兄さんという感じだ。

「いらつしやうい、一名様でいいのかな？」

私が無言で頷くと、真ん中の椅子に座るように言われた。椅子に座る前に店内を見渡す。内装も至って普通の屋台だった。少し汚れているがそれがまた、店に味のある雰囲気を出している。これは期待出来そう。そう思いながらも、少し不思議なものがあった。

一番端にいる白い猫だ。その猫は小さい座布団の上で丸くなっているのだが、ピクリとも動かない。だからといって、作り物かというところもみえない。毛の一本一本が自

然に生えており、顔の形や骨格までもがとでもリアルで今にも動き出しそうだ。

私が不思議そうに猫を観察し、触ってみようと手を伸ばした時

「できればその猫、触らないでおくれ。機嫌を損ねると後が大変だから。それでも触りたいなら構わないけど、注意はしたからね？」

と言われてしまった。その表情が少し不気味だった。顔は笑顔、その言葉も親切心から言っているように聞こえるが、言われた瞬間に背筋に悪寒が走る。流石に私ここまで言われたなら猫を触る事を諦め、椅子に座り、品書に目を通す事にした。

少し汚れてボロボロになっている品書には、

焼き鳥におでん、煮物、漬物、燻製など一通り酒のつまみになりそうな物が揃っていた。

その中に、聞いたことのない物がいくつかある。

ソーセイじにちーず、鯖の缶詰、ころつけにぐらたんなど他にも色々あるが、少なくとも私は知らない。人里出身の私が知らないなら余程珍しい料理か、もしくは外の世界の物か……

「お嬢さん、何にするか決まったかい？」

それらが何か考えていると、店主らしき男に注文を聞かれた。私は慌てて品書の中から何を注文するか決めた。

「このころつけ？つてやつを2つ、後はそれに合いそうなお酒が飲みたい！」

「あいよっ！コロツケ2つにそれに合う酒だね。少し時間を貰うけど大丈夫かい？」

と笑顔で答えてくれた。私が頷くと

「それまではこれでも食べて、待っていてくれな〜」

目の前に小鉢と箸を置いてくれた。どうやら野菜の浅漬のようだった。中には美味しそうに漬けてた、白菜に胡瓜、かぶなどが入っている。

箸を割り、胡瓜を一口頬張った。その瞬間に、口の中にちようど良い塩気と胡瓜の食感が溢れた。続けて、かぶに白菜も食べたが、ただの浅漬とは思えない。今までに食べた事がないくらい美味しい。

食べ続けていると、奥でパチパチと油が跳ねるような音がした。覗いてみると白い塊を油が入った鍋に入れて、揚げているようだった。少し経つと香ばしい香りが店中に広がる。何が出来るんだろう、そう考えていると数分過ぎて、塊が油の上に浮いていた。それを取り出し、網で油を切っている。

茶色い小判形のあれがころっけなのだろうか？やはり私は見たことがない。

「あいお待ち！これがコロッケとそれに合う酒な！」

目の前のテーブルに千切りキャベツところっけ、端にはトマトがある。それと一緒に出された酒を見て再び驚く。ガラスのような物に琥珀色の液体が注がれており、上には白い泡のような物が浮かんでいる。少しでも動かすと今にも溢れそうだった。

「いただきますー！」

まずは、ころっけを一口。

ザクザクツと音が鳴る。口の中が火傷しそうなくらい熱かったが、少し甘味のある芋の味と挽肉の味が口中に広がる。今まで食べたことがないし、とても美味しい。このまま食べ続けたい、しかしこのままでは口が熱すぎて食べ続けられない。

一緒に出された酒の事を思い出し、把手を掴みグイッと飲んだ。

琥珀色の冷たく泡立っているものが上の方からどんどん落下してきて、シュワシュワと泡立ちながら、舌を冷やし、頬を冷やし、のどを冷やしていく。

冷めた口にまた一口、また一口と食べ進めていたら、ころっけも酒もいつの間にか全て食べ終えてしまっていた。

「ご馳走さまでした！」

「いい食べっぷりだったね。そんなに美味かったかい？見ていてとても嬉しいかったよ」

私はまた無言で頷く。しかし不思議だ、これだけ美味しい物が作れるなら人里で店を構えた方が、よっぽど客の入りもいいし儲かるだろう。

一人で考えている私の心が読まれたのだろうか店主が

「俺は人里では店を出さないよ。たまに近くまで行くことはあるけどね。あそこだと人が多すぎて俺一人じゃ仕事を追いつかないし、それに勿体ないだろ？」

せっかく幻想郷にいるんだもの、いろんな場所で沢山の人や妖怪に俺の料理を知って欲しいからさ」

成る程と納得した。人里に店を構えたら、客は入るだろうが殆ど同じ客ばかりで、新しい客が来る事は少なくなるだろう。各地を渡り歩きながら店をすればそれだけ新しい客も入ってくる。

うん……？さつき妖怪もって言わなかったか??

「おっ！陣さんいらつしやい。今日は先客がいるけどいいかい？」

「先客がいるのは珍しいな。ああ、神社の巫女とよくいる魔法使いじゃないか。此処で呑むのはいいぞ！酒も飯も美味いし、何より楽しいからな！」

背後から声が聞こえて振り向く。そこには大柄の猿の妖怪が甚兵衛を羽織つて立っていた。私は直ぐに迎撃態勢に移ろうと、帽子から八卦炉を取り出そうとしたが、

「おっと、ここで争い事は辞めときな、この居酒屋でそれは御法度だ。わしも森の大将に出禁にされたくないでね」

言葉は丁寧だが、その一言一言に重みがある。それによく見るとこの妖怪はかなり強いだろう。幻想郷で生きていれば嫌でも身に着く、生きる為の勘だ。それに相手は争う気は毛頭無いように思える。私は八卦炉を帽子にしまい謝った。

「すまなかつた。あまり見かけない妖怪だったからの驚いてしまつて」

「気にしないでもいい。いきなり背後に猿顔の妖怪がいたら誰でも警戒するだろ！わし
だったらすぐに殴りかかっておるわい」

店主と猿顔の妖怪が一緒に笑っていた。どうやら顔馴染みらしい。陣と呼ばれた妖怪は、品書を見ずににいつものやつを2つずつと注文した。

「お嬢ちゃんはなんでここで呑んでるんだい？確か今日は博麗神社で宴会をしてる筈だが」

と聞かれ、神社で宴会はしていたが酔った霊夢に箒を折られた事などを話した。すると陣と呼ばれた妖怪はまた大笑いしだした。

「それは災難だったなあ。だからこんな所で呑んでいたのか。まあそんな事はここで呑んでればすぐに気にならなくなるさ。ほら、そろそろ出来上がる頃だぞ」

「へいお待ち！スパイシーソーセージと生ビール2つ！」

目の前に香ばしい肉の焼ける匂いが漂い、皿の端に黄色い物が添えてある。それとさつき私が飲んだ酒も一緒に出される。これは美味そうだ。

「それは驚かせた詫びの代わり、と言っちゃあなんだ。わしと話しながら楽しく飲もうじゃないか！」

そこからはとても楽しい時間だった。私は宴会で起こった事や、異変解決の武勇伝、他には霊夢より強くなりたいたいから努力しているが全く追いつけない事、とにかく色々話した。どうやら陣さんは狒々と言う妖怪で妖怪の山に住んでいる。店主とは長い付き合いで、月に何度かこの店に呑みにくるらしい。今日は部下の教育が上手くいかず、一杯呑みたい気分だったから立ち寄ったのだと。

ふと時間が気になり、懐中時計を帽子懐から取り出す。時刻は11時39分を指している。そろそろ家に帰らなければ。

「店主さん、お会計は………??」

「ああ、それなら……」

と横にいる陣さんに視線を向けていた。

「今日はわしが払おうかな。なに、楽しませてくれた礼だ。そうだ大将、あれ頼めるかい？」

「あいよーちよいと着替えるから待ってておくれ」

あれとは一体なんだろう？

陣さんは店より奥にある森が少し開けた場所に歩いて行った。私もあれがなんなのか気になり、付いて行く。

「陣さん。これから何をするの？」

「そうさな、この店に来る者は大体ふた通りいてな。魔理沙みたいに酒や料理が目的な者。もう一つは大将との力試しが目的の者が此処に来る。わしの場合今日は呑むのが

目的で、力試しはついでみたいなものだが」

力試し？妖怪の陣さんと店主さんが??

まさかとは思ったが陣さんの表情がさつきまでと違うことに気づく。大声で笑いながら酒を呑んでいた顔はなく、目を閉じて集中している。どうやら本当のようだ。

「おまたせしました。さて、今日はどうしましょうか？」

奥から着替えて終えた店主さんが出てきた。さつきまでの服装とは違い、動き易そうな袖が短い服にズボンを履いている。

「魔理沙もいるからあんまり危険な物は駄目じゃな。お前さんが5分間倒れない、でどうじゃ？」

「了解！それなら大丈夫だな。すみません魔理沙さん、5分間測つて貰えますか？」

私は頷きながら懐中時計を取り出し時間を見る時刻は11時46分だ。

「魔理沙、掛け声を頼む！飛び切り大声でな!!」

「じゃあ、今から51分まで。よーいスタート!」

私が叫んだ次の瞬間に陣さんの姿が私の視界から消えた。

魔法の森二夜目

「よいい、スタート!!」

私が叫んだ瞬間、陣さんの姿が私の視界から消えた。

まずは軽く様子みじやな。

さて、どう捌いてくるか。

わしは大将の顔めがけて拳を振るう。

恐らく、躲すか受け流してくるはず。そこを追撃して、大将のペースを崩しこちらの流れを作りたい。

だが、わしの予想は両方外れていた。

躲す事も受け流すこともせず、わしの懐に詰め寄ってきた。拳の間合は潰されたから、咄嗟に右の膝蹴りに切り替える。それすらも読まれていたのか、当たる前に足を払われ、体勢を崩し掌底が顎に当たってしまった。

頭蓋骨に脳が当たり脳が揺れ、視界が一瞬真っ白になる。続けて鼻、こめかみ、鳩尾と流れるように激しい連打が繰り出される。この状況はまずい。このまま大将のペースが続くと、わしはなす術がなくなり負けてしまう。様子見はここまでじゃな。

「妖技・神風招来」

わしの周辺に積乱雲を呼び寄せる。辺り一面に暴風雨を撒き散らし、強制的に相手に距離をとらせる。距離を取らずにその場にいれば、激しい風雨が相手を巻き込み上空へ放り上げる。そこで内部に発生している雷に四方八方から襲いかかり焼け焦げるだろう。

流石に大将でもこの術は受けたくないようじゃのう。後方に跳び、距離をとっておるわい。まあこの暴風雨が消えればすぐに距離を詰めて来るじやろうし。

「今度はこちらから行かせてもらおうぞい？」

『妖技・纏風神』

辺りを激しく暴れ回っていた暴風雨がぴたりと止む。

この妖技は呼び出した暴風雨をわしが吸収して、一時的に身体能力を上昇させ疲労を軽減する。これで大将のスピードを完全に上回った。先のように間合を詰められてもわしの方が先に反撃できる。

「えっ、陣さん風神まで使うんすか!? それだと周りにも被害が…。」

「あれだけ殴ってくれた礼じゃよ。被害がでない程度に加減はしてやるわい。素直に受け取れい!」

先の仕返しと言わんばかりに、大将の鳩尾目掛けて前蹴りを打つ。流石の大将でもこれは反応できない。前蹴りが見事に大将に当たった。大きく後方に吹き飛んだが鳩尾はしっかりと手でガードしている。まさかこの速さに対応しこれも防ぐとは。まあ防がれても次があるがな。

大地を強く蹴り、後方に飛んで行った大将を目掛けて跳ぶ。そして頭上から迫る様に、地面に拳一閃。大きな音と共に大地裂け、風圧と土煙が辺りを覆う。しかし、感触

からして大将には当たっていない。

どこに行つたのかと気配を探る。遠くに気配が一つ、これは大将ではない。離れて観戦してゐる魔理沙の気配じゃな。

目の前に気配が一つこれが大将……！この土煙のせいでわしの正確な位置はわからず、この攻撃も認識出来ないじゃろう。これで勝負ありじゃ。

「フンッー」

爪に風を集中させて、気配の方に飛ばす。風と共に土煙が散りそこにいた大将の右腕を吹き飛ばした。これで戦力はかなり削つた。だが、勝利を確信したわしの目に移つたのは……

「……………木の葉？」

先まで大将だつた物がいた場所には、なぜか真つ二つに裂けた葉が一枚ヒラヒラと落ちていった。何故大将がおらず木の葉が舞っている？あれは大将じゃない？ならば考

えられる事は……

「大将得意の変化術か。わしとした事が、まんまと化かされたわ!」

「陣さん、追加注文もありますぞ?」

『妖術・狸の変幻葉』

大将の声が聞こえ、わしの視界が一瞬白い光で包まれ目が眩む。視界が眩んでいても気配ぐらいいは分かる。後ろに気配が1つ、2つ、3つ……。

合計7つの気配がある。1つは大将で残りは妖術で出した偽物じやな。しかし参ったのう。わしには偽物と大将の区別がつかない。即ち全ての気配が本物の大将同じという事だ。

視界が覚醒し、見えるようにはなったが周りには大将と偽物が丁寧(ていねい)にわしを囲むように立っている。どれが本物か考(かん)えてる時間はあまり残(のこ)っていない。だが1人1人倒(た)すしか見(み)分(わ)ける方法(かた)が無い為(ため)時間(じかん)がかかる。

『妖術・狸火』

振り向くと、背後から蒼白い火の玉が無数に放たれる。わしに考える時間を与えないようじゃな。まあ数こそは多いがスピードはあまり早くない。これれぐらいなら難なく避けられるのう！

「大将やこの程度の焰、わしならいくらでも避けられるぞい。遂に万策尽きたかの？」

「それならこれは避けられますか？」

『妖術・狸の蒼炎七変化』

周りにいた7人全員が先の蒼炎をわしめがけて放ってきた。マズイ、この状況、先の連撃の方がまだ良かったぞ。わしの視界全てが、蒼炎の火球で埋め尽くされる。今はまだ避けられるが被弾するのは時間の問題だろう。

わしとしては被弾するよりも避けた後木にでも当たって山火事の方が怖いような気もするが。

『奥義・神爪剛嵐波』

左手に妖力を集める。集めてる間も絶え間無く火球は此方に襲いかかる。それをひたすら躲し、妖力を纏わせた左手でわしの周囲を横一閃。蒼炎の火球は風の風圧で全て散る。周りにいた7人の内、5人が一緒に巻き込まれ葉っぱに戻っていた。

神爪剛嵐派を避けた2人が前後でこちらに突撃してきた。

やはりわしが火球全てを消した後詰めてきおる。攻めるパターンが少し単調過ぎじやろ。そんなに近付いてこれが避けれるかの？

「風よ、今一度わしの元に戻りたまえ！」

背後から先に薙ぎ払った風が再びわしの元に戻ってくる。背後からの風では避けよ

うがあるまい。風は2人の大将を斬り裂いた。

「!？」

2人の大将は斬り裂かれ、葉に戻る。これも変化じやと!?
本物の大将は何処に……

「本日はご来店ありがとうございます。又のお越しをお待ちしています。」

頭上から声が聞こえる。うえッ……

『妖術・分福茶釜の鉄槌』

暗い夜空から巨大な茶釜が落ちて来る。

これは避けようがないわい。今回も勝てんとはな、どうやらここまでじゃのう。茶釜がわしの頭に直撃する寸前、わしの意識はそこでブツリと途切れた。

「……………」

意識が覚醒し、辺りを見回す。どうやら負けたわしを屋台の長椅子まで運んでくれたのか。そして負けたのか。今回こそはいけそうじゃったんだが。

「あつ大将、陣さんが目を覚ましたよ！陣さん大丈夫??」

「魔理沙か。わしは平気じゃよ、あれで死んだりする程やわくないぞい」

魔理沙に返事をしながら、今回の力比べについて振り返る。制限時間5分間の内に大将を倒せばわしの勝ちじゃった。最初の連撃と火球こそ危なかったがそれ以外は大きなミスもなかったはず。うーむ……………」

「陣さんお気づきになられましたか」

いつもの屋台で着ている服に着替えている大将がこちらにやってきた。

「なあ大将や。わしは今回どこで選択を間違えた？」

「そうですね。俺の連撃に対して神風招来から纏風神まではかなり良かったんですよ。風神を使われたら俺の速度じゃほぼ反応出来ませんし」

「わしもそこまでの流れは悪くなかったと思う。あのまま殴られ続けたらそこで終わっていたからのう」

「問題はその後。前蹴りからの空中攻撃ですね。その時、俺が躲して土煙が舞って視界が悪くなったでしょう？」

確かに土煙は舞ったが、じゃがそれはではお互いに認識は出来ない。特に失敗でもない……？

「その土煙が今回の失敗ですね。陣さんもお互いを認識できないでしょう？その間に俺が妖術を仕込む時間を与えてしまったんですよ。俺は耳がいいのである程度は把握できるので」

「変化で俺を作り、俺と入れ替わる。それを陣さんが攻撃して変化した葉っぱと分かり、驚いた瞬間に仕込んでおいた変化を使って攻撃、そこから妖術で追撃する。先に5体倒させて残りの変化が2体倒された所で俺は上空で待機してましたから。」

「確かにあの状況じゃあ、狸火と変化大将の事で上空までは気がまわらんかったのう」「まああそこで上空にも攻撃範囲がある術が使われていたら、俺は白旗挙げてましたよ」

やはり大将は一筋縄では倒せそうにないわい。最後に勝ったのはいつじやったかな。そういえば魔理沙はなにをしておるのかな？さっきの力比べで風が当たっていなかったか心配なのじゃが。

魔理沙はわしと大将の話が聞こえる場所に椅子を持って来て話を聞いていたようだ。今回の力比べの反省会が面白かったのか、目を輝かせている。

「陣さんも大将も凄いやよ！5分間であんなに激しい戦いは私は見たことがない！」

「うーむ。年頃の女子が聞いてても面白くない内容じゃと思うがのう」

「いやいや、すごい面白かったよ！私は大将の最初の連撃ぐらいなら捌けるけどあの後の術は防げるか分からないし。陣さんの風は魔法を使えば吹っ飛ばせるけど隙が大きいかからそこを攻められたら勝てそうにないな……」

『……………え?!』

わしと大将が同時に間拔けな声を出してしまった。魔理沙がああの連続撃を捌けるじゃと？わしの風も魔法で??

「いやほら、魔法使いでも接近線が出来ないと距離詰められたらなにもできないじゃん

？どうにかしなきゃって、それで身体強化練習して上手く扱えるようになったらそっちの方が得意になっちゃって……」

まあ確かに魔法使いとかは基本遠距離戦が基本だから近接戦は対策は必要だろうけど。大将と殴り合いが出来る魔法使いとか聞いたことないし想像するするだけで恐ろしいんじゃないか……」

「そういえば魔理沙流れ弾は飛んで来なかった？控えめにはしてたけど何回か広範囲技もあつたし」

「特になかったかかな。あ、風の刃が何度か飛んできたかな？なんか私に当たらず変な方向に飛んでったけどね」

「魔理沙、その時猫が近くに来なかった？」

「確かに来たよ。始まつてすぐかな？さつきまで寝てた猫がすり寄つて来たから喉撫でてたんだよ。そしたら帽子に乗つてきてさ、気に入られたのかわかんないけどその後は一緒に力比べを観てたよ」

「魔理沙やきつと風の刃が逸れたのはその猫のお陰じゃよ。後で礼でも言つて今度来るときは何か持つてきてやりな」

「わかった！」

その後、陣さんはそろそろ行くと言つて妖怪の山に帰つて行つた。私は猫と遊びながら大将と雑談してちようど一時になる前ぐらいには家に着いていた。

大将は当分魔法の森で屋台を出しているからまた友達でも連れて呑みに来なつて。今度来るときは霊夢かアリスでも連れてこようかな。

私は軽く汗を流し、その夜は眠りにつくことにした。

その頃大将は……

「蓮さん今日はありがとね。魔理沙を助けてくれたんでしょ？陣さん加減すると言っても熱くなると忘れちゃうからさ。お礼に明日の朝ごはんは豪華にするかなあ」

「ふにやう〜」

「はいはい。それじゃあ帰りますか〜」

今日あったばかりだけど魔理沙には初めて会った様な気はしないなあ。以前にどこ

かであつたかな？俺はあんまり人里には顔出してないからな、あるとすれば外で会つたか、後は香霖堂ぐらいいかな。

「明日は久々に友人の顔でも見に行きますかな〜！」

久々に会う友人の顔を思い浮かべると、どうしてきたんだい？聞きたいような渋い顔をされるのが脳内で浮かんできた。まああいつらしいか。

あいつちゃんと元気にしてるかな。

魔法の森三夜目

小鳥のさえずりが聞こえる。重い瞼をあげ窓の外を見ると丁度太陽が昇り始めたぐらいで綺麗な朝焼けが見える。

昨日の力比べから数時間しか経っておらず疲労が抜けきっていない。

それにしても陣さん、前よりかなり強くなっていた。負けない為に俺も努力しないといけないけど。誰か丁度いい相手が居ないか探さないといけないな。

「ひとまずは、朝飯食ってそれから香霖堂に行くか」

家から外に出てちょうど左側に俺の畑がある。そこには俺の店で使う野菜や果物が青々と元気よく育っている。その中から長く、立派に育った茄子を数本収穫し、家に戻る。

七輪に炭を入れて火を起こし網を炙る。その間に茄子の側面に隠し包丁を入れ表面

が黒く焦げてくるまでじっくりと焼いていく。その間にもう二品作る。

卵を4つ冷蔵庫から取り出し、ボールに割り入れ塩胡椒、醤油、酒、出汁を少々入れよくかき混ぜ卵液を作る。用意した1/4量の卵液を流し、半熟状になったら、向こう側から手前に巻く。鉄鍋のあいた部分に再び油を塗り、巻いた卵を向こう端にずらす。手前にも油を塗る。手前に卵液1/4量を流し、巻いた卵の下に箸を当てて卵焼き器を斜めにして隙間に卵液を流す。この作業を繰り返して卵を焼き上げ、巻きすで巻いて形を整える。

これで二品目が完成した。

後は冷蔵庫の中から鮭の切り身をふた切れ取り出し、皮に焼き色がつくまで焼く。これで三品目も完成だ。

七輪で焼いていた茄子を準備しておいた氷水につけて皮を剥く。手が冷たくてうまく動かないが美味しい焼き茄子を食べる為なので仕方ない。

剥き終わった茄子の水気を取り器に盛り付ける。

今日の朝食は、

御飯

厚焼き卵

焼き茄子

焼き鮭

後は作り置き of 沢庵に味噌汁だ。

ここまで作るのにかかる時間が大体30分。まあこの内容ならこんなものだろう。余った米でおにぎりも作っておく。具はおかか鮭、昆布だ。

「いただきます」

まずは厚焼き卵を一口食べる。出汁と醤油が口の中で優しく広がっていく。香りは丁度いいが少し塩気が強い。次回は塩を少し減らしたほうがいい。

ご飯を食べながら焼きなすをかじる。氷水の中で皮を剥いたため、身がしつかりしていてとても美味い。次にポン酢を垂らし一口。酸味が加わり先程とはまた違う味になる。これは成功だな、これなら店でも出せるだろう。

などと今日の出来を一通り振り返りながら済ませて、洗い物をしながら外出と買い出しの計画を立てる。

畑の野菜たちに水やりをしてから酒、醤油、味醂など調味料が切れかかっているの
で買い足さなければならぬ。昨日陣さんが酒を浴びるように呑むから酒の在庫が無く
て今日は店を休みにしないといけないんだよな。

後は明日使う食材の仕入れもしなければいけない。人里で調味料を買って太陽の畑
で足りない野菜を貰う。マヨヒガに行き必要な生鮮品のメモも置く。それと早めに仕
込みができるものは済ませると……。

これなら午後には香霖堂に顔を出せそうだなあ。

「よし、動き始めるか」

畑の野菜に水を撒き、目についた雑草を抜きとる。茄子とトマト、オクラにもろこし
がちょうどいい感じに育っているので少し多めに収穫する。

出かける前にちやぶ台の下に蓮さんの朝食を置いて俺は家を後にする。

人里できれかかっていた調味料を買い足した。いつも通っている酒屋さんで全て揃えられるので手間が省ける。その時に朝とった野菜をお裾分けしたら調味料を多めにに入れてくれて、おまけに自家製梅干をいただいた。

この梅干を使った料理を閃き、明日の店で出せる品が1つ決まった。

人里を出たらそのまま太陽の畑に向かった。ひまわりの周囲を散策しても誰もおらず、普段ならそこにいるはずの小屋をノックしても反応がない。どうやらこここの主人は今外出中のようなだ。花のある所にふらつと出向く人だから居なくても仕方ない。

俺は書き置きと朝作ったおにぎりを日陰に置いて、足りない野菜類を貰っていく。この主人は無類の花好きで、色々な花を育てるついでで野菜も育てているのだ。それで俺の畑だけじゃ育てられない野菜なんかをたまに貰いに来る。

基本的にこここの主人はあまり他人と交流をする方では無い。怖いし少しでも怒りに触れたら塵も残らない。だが一部の人間は関わりを持っていうようで、何故その一部の中に俺がいるのは謎である。

その後はマヨヒガに向かい目印の木下に必要な生鮮食品のメモとおにぎりを置いておく。ここにはある人が住んでいる。あんまり名前は出したくない、いきなり背後に現れそうで怖いから。

その人？いや妖怪なんだけど外の世界へ自由に行くことができる能力があり、専ら肉とか幻想郷じゃ取れない魚とか食材はこの妖怪頼りである。

俺は食材の仕入れを頼む代わりに店に来た時お代は貰わず、必要な食材がある時はなんらかの飯とメモを一緒に置く事になっている。だが、この妖怪もかなりの酒豪なので酒代が馬鹿にならないぐらい飲む、が背に腹はかえられない。

一通り店で使う物が揃ったので家に一度戻った。

昼食はさつき貰った梅干と朝の余り物の鮭、塩昆布をご飯に盛り、上から特製だしをかけた冷静出汁茶漬だ。

「貰い物と余り物を入れただけだがなかなかいけるな」

冷製茶漬けを掻き込み洗い物を済ませ調味料をしまい、野菜は一纏めに氷水につけておく。こんなに暑くてもこの氷は特別製なので簡単には溶けないから夜まで保つだろう。

「後は……つと」

戸棚の裏に隠してある秘蔵の酒と、数日前に貰い冷凍してある肉と野菜数種類他にも調味料を少々を籠に詰めてつと。これで準備はできた。

「いざ、香霖堂へ突撃だ！」

家を後にしてまず店を出している位置まで行く。ここからだと案外香霖堂も近いんだよな。4日間ぐらい店を出していつも賑やかだから香霖堂まで聞こえるだろうし顔ぐらい出しに来てくれると思ったけど……。

そんな簡単に出不精のあいつが外に出るはずもなく。まあ出てこないならこつちか

ら行くまでよ。

しばらく歩くと見覚えのある屋根が見えた。人間の里よりも少し奥にある魔法の森近くにある店、それが香霖堂だ。

それにしてもなんでこんな人が近寄りづらい場所に店を建てたんだろう。人里に住んでる人間からしたら、魔法の森なんか妖怪がいるから危ないって誰も近寄らないし商売にならないだろう。

「そんな事言ったら俺も人の事は言えないか……」

家があるって言っても、材料と調味料が置いてあるただの寝床だし日中は殆ど家にいない。店も幻想郷中を回ってて毎回家までは帰れないから先々で小屋を借りてあるぐらいだし。

俺は香霖堂の入り口を数回ノックした。

しかし返事はない。あいつの事だし、居留守でも決め込むつもりか？とりあえず中に
入るか。

「ちわくす、霖之助邪魔するぞ」

店のドアを開けると薄暗く物の多い店内が目に入った。店の壁の棚にはこれでもかとガラクタもとい品物が置かれている。明らかに使い道が無さそうなゴミのような物も混ざっているが。

しかし困った事に、店を見回しても店先には誰もいない。が奥から音がするし、人の気配はあるので誰かがいるのは確かだろう。

「霖之助く奥にいるのはわかってるから早く出てこいよ。いるんだろ?！」

足の踏み場が少くガラクタが積まれているので倒さないように慎重に歩きようやく奥の間についた。

居間には冬から片付けていないのか出しっ放しのこたつにテレビはあるが人はおらず、お勝手にも人は見当たらない。だが炊飯器のスイッチが入っていたり、ガスコンロの上の土鍋の中に昆布がはいっていても今もフツフツと音を立てている事からして誰も居ないという事は無いはずだ。

ガタツ

後ろから何かが落ちるような音がした。

今に戻ると、何か落ちたものがテレビのリモコンだという事がわかった。確かにこたつの端の方に置かれていたが自然に落ちるような場所ではなかったから……。

「……………」

無言のままこたつをめくる。中には昨日会ったばかりの魔法使いがなんとも言えない表情をして隠れていた。

「あゝ、魔理沙さん？こたつの中になにしてるの??」

「昨日大将の所で美味しいご飯を食べたら誰かに作ってあげたくなくて。最近ここに顔出してなくて。それで香霖堂によつて昨日の話したら香霖がたまには美味しい飯が食べたいて言つたから私が作つてるの。」

なるほど、魔理沙が料理していたから炊飯器とか鍋に火がついていたのか。それよりも魔理沙と霖之助に関わりがあつた事の方が驚いたが。

「で、魔理沙は何の料理を作ろうとしたの？」

「きのこの炊き込みご飯と鍋を作ろうとしたんだけど……」

「季節は少し早いけどいい組み合わせだね」

ただと魔理沙が少し頬を赤くしながら

「きのこご飯はよく作るけど、鍋はあんまり作ったこと無くて。ひとまず昆布で出汁をとってたら入口から音がして……」

「俺が来たのね」

なるほどね。出汁を取っていて急に誰かが店に来たから咄嗟に隠れたけど、鍋の火を止める余裕までは無かった。だから土鍋が火にかけっぱなしだったわけか。

「魔理沙さんや。鍋を作るなら俺も手伝えると思うけどどうする？必要無いなら今日の所は家に帰ろうと思うけど」

少し俯いていた魔理沙が顔を上げる。こちらを見る表情はまさに救世主をみるような顔に見えた。

「大将お願い！私は美味しく鍋を作れるかわからないから、代わりに美味しい鍋を作って!!」

うーん。俺が作ってもいいんだけど……

「それならこうしよう。俺はあくまで手伝うだけで、代わりに鍋作り方の手順や野菜の切り方はしっかり俺が教えてやる。せつかく自分で作ろうとしたんだ。最後まで自分でやらないきや勿体無いだろ？」

魔理沙は納得してくれたようだ。張り切つて腕まくりをしている。後は俺がしっかりと作り方を教えるだけだ。魔理沙は、霖之助の為に美味しい飯を作ろうとした。だがそこで俺が鍋を作つてしまつたら、なんの意味も無くなつてしまう。魔理沙が頑張つて踏み出した一歩が無駄になる。

それなら、俺が教えて魔理沙が作ればいい。最初から料理が完璧にできる奴なんて殆どいない。誰もが失敗を繰り返し、その失敗を糧にとして成長し上達していく。そうしないと、どんな事も身に付かないだろう。

「では、これから美味しい鍋の作り方を教えよう！分からない所があつたら、しっかり俺に聞くんぞぞ？」

「お願いします！」

こうして香霖堂のお勝手で俺の美味しい鍋作り講座が始まった。

魔法の森四夜目く

「さて、今回作る鍋は牡丹鍋だ。魔理沙は牡丹鍋ってなんの鍋かわかるか？」

「流石に花の牡丹を入れるわけないし……。分からん」

まあそうだよな。牡丹鍋はいつでも食べれるわけじゃないし、肉屋にも殆ど置いてない。

「牡丹鍋は猪の肉を使った鍋の事だ。何故牡丹と言うのか、それは猪肉は赤みが濃くてそれを薄く切り、盛り付けた時牡丹に見えるかららしい。」

「私は、獣肉系はあんまり食べないけど美味しいの？」

「美味しいぞ。味は牛と豚の中間みたいな味だな。成長具合によって料理の種類は変わるし。今日の肉は雌の幼獣だから鍋にぴったりだ」

成獣だったら長時間煮込んで角煮なんかも美味しいんだよなあ。煮込めば煮込む程硬い脂がトロツとした触感になってたまらない。今度仕入れる時に聞いておくか。

「よし、説明はこんなところにして鍋を作り始める。まずは手と包丁、まな板を洗うぞ。どうせ霖之助の事だし、長い間使つてないだろう。そうじゃ無くても洗うのは基本だがな」

俺も手を洗い、家から持ってきた材料を広げ作業内容を確認する。

猪肉は切るのが手間だから先に切つてある。他に持ってきた野菜類は長ねぎに人参、白菜、牛蒡に里芋と椎茸とえのきだけ。後はこんやくと木綿豆腐だな。

味は味噌味にする。白味噌、赤味噌、酒多少、砂糖、みりん、昆布とカツオだしかな。あと俺好みの粉山椒と七味。

「魔理沙にはまず、人参と椎茸を切ってもらうかな。比較的切り方はむずかしくないし。」

「そんなに簡単なのか？」

「簡単だと思う。人参は輪切りにする。厚さは3～5mmぐらい。これで人参は完成」

「次に椎茸の切り方だな。これは生椎茸だからまず石づきをとる。石づきは椎茸の一番下にある黒いとこだ。そこは硬くて食べれない。その後軸を切つて傘の一箇所には切れ込みを入れる。大体35度ぐらいの角度だ。それを反対側にやる。それをもう一度場所を変えて切れれば完成さ。ついでにエノキダケも石づきだけ切つて大体3分の1ぐらいで切る。ざつとこんな感じだな。どうだ、できそうか？」

「できるかわからないけどやってみる！」

「失敗上等、最初は誰でもそんなもんだ。横で俺もみてるしわからなかつたら聞けよ」

横で魔理沙が包丁を手に人参を切り始める。包丁はしっかり持てているが、輪切りにした人参の厚さは少し厚めの1cmぐらい。まあそれぐらいなら少し早めに入れば火が通る。初めてにしては上手く切れてる方だな。

「さて俺も頑張るかな！」

まず、猪肉に粉山椒をまぶし、皿に牡丹の華に見えるよう、上手く並べる。俺も並べるのは久し振りで多少不恰好だが牡丹に見えなくは無いだろう。

次にこんにやくを鍋で湯を沸かし下茹でし、アク抜きをする。こんにやくは先に一度茹でておかないとアクの臭いが残り、食べる時も臭ってしまう。

牛蒡に里芋は水洗いで泥を落とし、牛蒡は斜めに切る。切り終えた物は水につけておく。つけておかないと牛蒡が空気に触れて酸化し、黒くなってしまう。

白菜の葉の固い部分は、大きくそぎ切りにし、やわらかい部分は5センチ位のぶつ切りにする。

里芋は皮を剥いた後一度ゆでこぼしをしておく。これをすれば余計な粘りが消え、味も一段と染み込みやすくなる。

木綿豆腐は3cmの長方形に切る。長ねぎも、牛蒡と同じく斜め切り。後茹で終えた里

芋とこんにやくをザルで水気をきる。これで大体食材の下準備は完了したかな。後はこれを大皿に盛り付けてつと。

他に必要な作業は一番大事なだしづくり。昆布とカツオの合わせだしはもうできている。その後の味噌の調合だけしておけばすぐに終わるからそんなに手間はかからない。

ただ今の時刻は午後4時21分。霖之助のことだからどうせ5時前ぐらいには帰ってくるだろう。それまでの時間はどうするか。

「大将、切るの終わったよ」

どうやら魔理沙の方も終わったらしい。既に洗い物も終わってるし、鍋とガスコンロの準備もしてある。いよいよやる事がなくなつたぞ。うーむ。

「他に切るものとかあるの？」

「いやこれで切るものは全部終わつた。食べ始めるにしても、霖之助がいらないんじゃないやど
うしようもないしなあ」

「もう近くまで帰つて来てるかもしれないから私探してくる！」

そう言つて魔理沙は、箒を片手に香霖堂を飛び出した。霖之助と入れ違いにならない
といいんだがな。

「俺もやる事無いし掃除でもしてるかな。ガラクタあたりは怒られそうだからできる限
り触れないようにつと」

まずはお勝手の掃除だな。

そんなに汚してはいないからそこまで大変じゃないだろ。流し周りを先ほど出た人
参のへたと皮に少量の塩をつけて磨く。これだけでも十分に汚れは落ちる。使えるも
のは使わないと勿体無いし。後は乾いた布で拭きあげつと。よし綺麗になつた。こ
まめに掃除をすれば汚れずにすむ。

あたりは日が落ち始め、少しずつ暗くなる。まあまだ帰ってこないだろうから掃除を続けるか。

次は茶の間。邪魔なものは部屋の一箇所に固める。片付けていると、はじめのほうに置いてある手頃な新聞を見つけた。数刊水で湿らせて部屋に撒いていく。

こうすることで新聞の湿気で埃が舞いにくくなり、掃き掃除が一段と楽になる。

「君は一体なにをしているんだい？」

ほうきであらかたのゴミを取り終わった時、背後から声をかけられ振り向いた。

「霖之助、やっと帰ってきたのかい？」

そこには白髪に眼鏡をかけた男が一人、呆れたような顔をしながらこちらを見ている。

「ガラクタ収集から帰ってきたら、奥から物音がして泥棒にでも入られたかと思つたらまさかの君か。」

「ありがたく思えよ。この散らかった部屋を掃除してやつてるんだぞ？」

「僕は一言も頼んだ覚えは無いがね」

お互いに相手に皮肉を言い合うのはいつもどおりのことだ。言われているのは皮肉だが、俺は案外このやりとりは嫌いじゃない。なんか「霖之助」って感じがして安心する。

「で？今日はどうしたんだい。まさか本当は泥棒してきたのかい？」

「なんで泥棒が入る家を掃除するんだよ。猪肉と美味しい酒が手に入ってたな。牡丹鍋でもしようとしたが、どうせ食うなら寂しく家で食うより霖之助とでも食った方がいいだろうと思ってるな。どうせまだ飯は食ってないだろう？」

「まあ食べてないから頂くが。これから作るのかい？もう7時をになりそうだ」

「いや、下準備はもう終わってる。後は煮込むだけだ。」

掃除が終わった茶の間のこたつの布団を外し、卓の上にガスコンロを持ってきて鍋に火をつける。

「ちよつと待つてくれ。どうせ食べるなら外で食べないか？ 星空を覗ながらの鍋も悪くないと思うのだが」

「おつ、それいいな。じゃあ布でも下に引いて外でやるか」

急遽場所を茶の間から、香霖堂前の空きスペースに布を敷きそこで食べることにした。星空を覗ながら鍋か。普通やるなら冬だと思うが、まあいいか。

大体の準備が終わった頃、出汁などを温めて始めて野菜と肉を入れようとしたとき

「あーっ!! 香霖が先に鍋始めてる!?!」

霖之助を探しに行っていた魔理沙がようやく帰ってきたようだ。

「おー、おかえり魔理沙。まだこれから野菜を煮始めるところだからギリギリセーフだぞ」

「なんだい。魔理沙も来ていたのか。今日はうるさくなりそうだね」

「一人で食べる夕食よりよっぽどマシだぜ」

魔理沙と霖之助が軽く口論になっているがお互いに笑っているのです、このやりとりもいつも通りなのだろう。

「ほれ、今日の本題は口論じゃなくて牡丹鍋だろ？まあ食わなくていいなら口論しててもいいぞ」

香霖がやれやれと言い魔理沙をなだめて鍋の周りについた。それに続いて魔理沙も座る。

「さてこれから煮始めるが少し時間がかかるから何か話題でもないか？俺無言の時間は好きじゃないし」

「それなら今日香霖はどこまで行ってたんだ？大体いつも5時前には家にいるのに」
「ああ、それはだな。今日は少し遠出しようと思ってるね」

今日帰ってくる時間が遅かったのはガラクタ集めが原因らしい。いつもは魔法の森近辺しか散策しないのだが、珍しく無縁塚まで行ってきたのだと。ただ、これといった収穫が無くて何かないか探していたらこんな時間になってしまつみたい。

「僕は魔理沙と君が知り合いだった事に驚いたのだがどこで知り合つたんだい？」

「あー。ほら俺が屋台で居酒屋やつてるのは霖之助も知ってるだろ？ここ最近魔法の森で店を出しててな。それで偶然魔理沙が俺の店に来たんだよ」

「飽きもせずまだやってたのか。てつきり僕は魔理沙を化かして退治でもされたと思っ
ていたがね」

「最近はそんなに化かしてないの？屋台はもう習慣化してるから、飽きて辞める予定当
分はないな。もう十年ぐらいか」

「そうか。君と出会ってからもうそんなに経ったのか。時間の流れは早いな。まあ、こ
ればかりは誰にも変えられないから仕方がないか」

「おつ、駄弁ってる間に鍋の方がいい感じに煮えてきたぞ。そろそろ食べようぜ」

「そうだね、今日は僕もかなり歩いて空腹だしご馳走になるよ。魔理沙お碗を取ってき
てくれ。場所はわかるだろう？」

トタトタと魔理沙が小走りで家の中にお碗を探しに戻り、俺と霖之助の二人きりに
なった。

その間に鍋猪肉を入れて煮込む。最初から入れてる肉とはまた違う食感がするはず

だ。

「霖之助。前に会ってからもう3年ぐらい経った。俺が頼んでいた者は見つかりそうか？」

「まだ見つかりそうに無いね。幻想郷もそんなに広く無いから、こんなに見つからないのはおかしいんだ。もう少しだけ待ってくれ」

「まあいいさ。幻想郷に必ずいるはずだからな。そのうち見つかるさ」

「なんお話ししてるんだ？」

お碗を探しに家に行っていた魔理沙が戻ってきた。手にはお碗3つと箸3膳。

やけに綺麗な漆塗りの器と箸である。これ絶対拾ったやつだろ。こいつの家にこんな高価な物あるはずないし。まあ別に俺に何かあるわけじゃ無いからいいが。

「いや探し物の話だよ。前から探しているんだがなかなかみつからなくてさ」

「そんな事より鍋！さつさと食べようぜ。早くしないと肉だけ全部食っちゃうぞ」

魔理沙が慌てたように鍋の近くに座った。これで今日の夕食がにぎやかにすごせそう。お椀に牡丹鍋を盛り付ける。野菜のと味噌のよく煮込まれた甘い香りがする。これはうまくいっただな。

「では皆さま。今日も一日お疲れ様！俺特製の牡丹鍋思う存分食ってくれ。それじゃあ！」

「「いただきます！」」

うーん。美味いっ！やっぱ牡丹鍋はいいな。この野菜の甘味と肉が煮込まれた事で流れ出た旨味が出てる汁がたまらない。野菜も柔らかく煮込まれてて口に入れると味がしつかり染み込んでいる。

猪肉も先に入れた方が柔らかく煮えていて、後から入れた方はちょうど良い歯応えが残っている。やっぱり猪肉最高だなあ。

それにしても、魔理沙はいつ見ても美味そうに食べるな。初めて店にきたときもそうだが、食べる時の反応が見ていて面白いし、見てて微笑ましい。

霖之助は……、やっぱり。眼鏡を外さないで食べてるから眼鏡のレンズが真っ白に曇ってる。あれじゃ何も見えないだろ。それでもしつかり鍋から猪肉を取れてるんだよなあ。

おいおい、もう殆ど鍋に猪肉も野菜も残ってないやん。俺まだ二杯しか食べてないのに。仕方ない、今度やるときは家でひっそりとやろう。

「さて。鍋の残りもあと少し。どうせまだお前達は食べ足りないだろ？ここでシメのご飯と生卵を準備して特性雑炊を作つてやる！」

先にご飯を鍋に入れて軽くかき混ぜ煮る。米が鍋の汁気を吸って膨らんできたら、火

を止めてとき卵をかける。鍋に蓋をして待つ事約3分。

「そろそろ頃合いだな、ほいっと。よし上手くできてる。特製卵雑炊の完成！」

各自でお椀に雑炊を盛り付ける。俺もこれが密かに楽しみにしてたんだよな。シメの卵雑炊のお味は……。

「大成功だな。野菜と肉の旨味を米が吸い上げてしつかりと味がついてる。上の卵もふわふわでたまらないわ〜」

あつという間に鍋の雑炊は空になり、今日は片付けをして解散となった。

帰り道、今日の出来事を振り返りながら明日の予定を組み立てておく。

明日は店を開けなきやいけなから、寝る前に食材と仕込みの確認だけして早めに休もう。材料はこの時間なら家に届いてるはず。

「今日は一日大満足。明日もまた頑張るかあ！」

こうして俺の賑やかな休日が終わりを迎える。

その時の俺は、まだ知らなかった。

次の日にあんなに大変な事が待ち構えていたなんて。

囚われの紅魔館一夜目

暖かな太陽の日差しが窓の隙間から差し込み、外から鳥達のさえずりが聞こえる。

「もう朝か、よく寝れたなあ。」

「あれ……？ここはどこだ？」

目が覚めた俺は眠い目を擦り、辺りを見渡すと違和感を覚えた。

その部屋は全体に赤を基調とした家具で統一されており、置かれている家具はどれも洋風の物ばかりだ。

1つだけ確かな事は、少なくともここが俺の家じゃない。

「ああ思い出した。俺負けて連れてこられたんだっけ」

霖之助達と鍋をしてから店を開いて3日程経った夜だった。仕事もひと段落して体がもう限界。その日は早めに店を閉めて寝ようと思いい、店じまいしていた。

そこに一人のメイド?のような服装をした銀髪少女が現れた。

こんな時間に来る客はほとんどいない。店の場所でも探してたのかな。

「悪いねお嬢さん、今日はもう店じまいなんだわ」

「お気になさらず。私の用事は店ではなくあなたにあります」

俺に用事??最近は特に何もしていないはずだが。

少なくともメイドを雇うような知り合い合いもない。

「率直に言います。貴方を紅魔館に連れて行きたいのです」

「……。紅魔館?」

そういえばスキマ姉さんが言ってたっけ。

最近霧の湖に、赤い洋館が現れて異変を起こしたとか。俺はその時食材の仕入れで地底にいたから異変自体気付かなかった。

まあ博麗の巫女がいつも通り解決したようだ。

「えーと、悪いけどそりや無理だ。俺にも生活があるし店もある。紅魔館には行けない」

「貴方の意見は聞いていません。お嬢様がお決めになった事です」

「つまり俺に拒否権は？」

「ごいませんね。自ら来ていただけると助かりますが、嫌なら力づくでも連れて行きます」

まいったな。どうやらこのメイドの主人が俺を連れてこいと言った。何度でも言うが、俺にメイドがいるような知り合いはいない。もう疲労が限界だから早く帰って寝たいのに、なんでこんな面倒なことになるんだよ。

「なら勝負しようか。俺が勝ったら家に帰る、俺も眠いからな。まあ負けたら紅魔館でもどこでもついていくよ」

「いいですよ。内容はどうしましょう？」

「それじゃあ先に相手に『参った』と言わせた方が勝ち。開始の合図はそうだな、この鈴が地面に落ちたらでどうだ？」

俺の片耳には鈴のイヤリングがついている。それを外し、メイドに見せた。ただのメイドなら負けないだろうし、はやく帰って寝よう。

「わかりました。約束は守りますよね？」

「俺は約束は破らない。それじゃ、始めるか」

俺は空にむかつて鈴を投げた。空は暗く月と星の明かりと提灯の明かりしかない。普通の人間じゃこの暗さじゃ何も見えないだろ。一度変化して姿を消す。相手が俺を探している間に背後をとり終わりだな。

「それではこれからよろしくお願いしますね」

「……は。」

チリンと鈴が地面に落ちる。変化しようとした時、目の前にメイドが消えて背後から首元にナイフを突きつけられた。そのナイフからは冷たい刃物の温度が伝わってくる。いやいやなんだよそれ。俺は一度も目を離してないのに、どうやって背後に回ったんだよ。

「まだ続けますか？」

「これはどうしようもないな。『参った』」

「では、紅魔館まで来ていただきます」

ただのメイドだと思って甘く見ていたらあつさり負けた。

あれはなんだったんだ。瞬間移動？でも音は聴こえなかった。空間でも操るかそれとも……。

「おはようございます。よく眠れましたか？」

いつの間にか扉の前に昨日のメイドがいた。まただ。さつきまでそこには居なかった、それどころか扉を開ける音すらしていない。

「お陰様でね。うちは布団しかないからこんな洋風なベットは憧れてたんだ。一晚寝たら体調も良くなったし、家に帰ってもいいかな？」

「お嬢様がお会いになるそうです。廊下にいる者に案内させるのでご同行願います」

「どうせ拒否権は……、ないんだろ？」

「私は仕事があるのでここで失礼します」

メイドは一礼した後部屋から出て行った。入ってくるのは無音なのに出る時は普通に扉を使うのね。よくわからんな。

寝起きの頭を掻きながらベットから出て扉の外へ出る。そこには廊下が広がり、突き当たりの奥には大きな扉が見える。ふと、目線を下に下げるとそこにはメイド服を着た妖精がちよこんと三角座りをしていた。

「なんで私がこんなこと、咲夜さんが自分ですればいいのに。忙しいのはわかるけど他の子もいるんだし」

「そんなところで何してるんだ？」

「ひゃわっ!？」

俺が部屋から出てきたことに気づいていなかったようだ。どんだけ愚痴に気をとられていたんだか。慌てて立ち上がり、乱れた服装を直しながら何事も無かったように、

「えーこほん。ようこそお客様、私は今回案内を命じられたメイドのシルです。どうぞお見知り。それではこれからお嬢様の部屋へ案内させて戴きます」

「少し質問してもいいか？」

「申し訳ありません、お時間が無いので歩きながらでお願いします」

そう言つて妖精メイドもといシルは歩き出す。俺も後ろを追いながら質問する事にした。廊下の突き当たり扉を開き奥に進んでいく。どこもかしこも赤だらけ。内装もほとんど赤い色で統一されているようで目が痛くなりそうだ。

「さつきから言ってるお嬢様って一体どんな奴なんだ？俺はなんの為に呼ばれたかもわからんし、そもそもお嬢様とも面識は無い筈なんだが」

「お嬢様は可愛らしい方ですよ。気紛れで自由で妹想いのお方です。ただ、お怒りになると大変な事になるのでお気をつけください。貴方のことは白黒泥棒から聞いたのでしよう。前に図書館のお茶会でそんな話をしていた気がします。」

「白黒泥棒？そんな色の泥棒がいるのか昼でも夜でもすぐに見つかりそうな色だが」

「確か霧雨魔理沙と言う名でしたね。図書館から気に入った本があれば死ぬまで借りていくと言い、全く返しにこない厄介者です。まあ図書館の主は気にしていないようですが」

白黒泥棒ってそういう事ね。魔理沙よ、借りた物はきちんと返さないと後々大変な事になるぞ……。この俺が言うんだから間違いない。今度あつたら注意しておくか。

「さて、つきましたよ。ここがお嬢様の部屋です。」

他の部屋の扉とはあきらかに装飾の違う扉の前に着いた。恐ろしげな頭蓋骨や十字架、蝙蝠などがあしらわれている。そして、1つのネームプレートだけがその雰囲気と明かにあつていなかった。ハートマークのプレートの中央に「Remilia」とつづられている。

「失礼します、お嬢様シルゴございます。お客様をお連れ致しました。」

シルはコンコンと二回扉をノックし部屋に入る。だが、部屋に人の影は無い。代わりに奥にあるベッドがもそもそと動きそこから小さく返事が聞こえた。今の時刻は大体9時前後位、確かに吸血鬼ならまだ眠っている時間である。

「シル、私まだ眠いからもう少し眠る」

はあ。軽いため息をつき、ベッドに近寄り布団を無理やり剥ぎ取った。

「お嬢様がお連れしろ、と申されたお客様がもうお見栄ですよ」

布団を剥ぎ取られたベッドに寝ていた少女が大きなあくびをし、まだ眠気が抜けていない目蓋を擦りながら体を起こす。寝起きだからだろうか、綺麗な髪が少し乱れて寝巻きのネグリジエがはだけている。

「おはよう、シル。もう昨日頼んだばかりなのに呼んだの？私まだ眠いのにく。客人は今どこにいるの？今から着替える……」

「もう部屋にいらつしやいますよ?」

「ふえ?」

部屋の入り口で気まずそうな表情をしている男と目があつた。そして今、自分の格好を確認する。状況を理解したのか、少し涙ぐんで一目を気にせず泣き出してしまった。

「これは俺が悪いのか……?」

「いえ、お嬢様の自業自得です。すみませんが少々部屋の外でお待ち下さい」

自分が悪い事した様な罪悪感に苛まれながら、俺は部屋を出た。これは俺悪くないよな? いきなり強制連行されて呼び出された拳句、呼び出した本人が泣き出すとかどうすりゃいいんだよ。

「お待たせしました。お嬢様がお呼びです」

一人で頭の中で色々考えていると部屋の中から声がかかった。どうやらうまくなだめられたらしい。もうこんな所じゃなくて家でゆっくりしたいよ。これで俺がなんか悪く言われたら何がなんでもで行ってやる。まあ今すぐでたいんだけどさ。

「失礼します」

「ようこそ紅魔館へ！私がこの館の主人、レミリア・スカーレットよ！」

さつきまで号泣していた少女はどこえやら。服装も寝巻きから着替え、ナイトキャップにフリルがあしらわれたドレス、胸元には赤い綺麗なブローチをつけている。

「えーと、その館の主人様が俺になんのように？俺はあんたと面識は無いはずだが」

「それはね！」

レミリアお嬢さんが何か言おうとした時、グーツと間拔けな音が鳴った。部屋の中が

なんとも言えない雰囲気になり、お嬢さんは頬をあからめながら必死に自分の腹を抑え隠そうとしている。

「今鳴った音はシルのお腹の音よ！きつとお腹が空いてるのね、仕方ないからまずは朝食にしましょう！私は別にお腹は空いていないけどついでに食べるわ！」

「咲夜く、ご飯まだく？」

「もう少しでできますのでお待ち下さい」

食堂に移動している道中で俺を連れてきたメイドの名が「十六夜咲夜」という事を知った。まあこれは本人からではなくお嬢さんが自慢げに教えてくれた。そして食堂まで行き現在に至る。

「なあシルさん、あのお嬢さんっていつもあんな感じなのか？」

「大体そうですね。寝室での事は仕方ないですが、先程の朝食についてもいつもあのような事を。」

「これでなんで俺が呼ばれた理由が理解できたわ」

あのお嬢さんが咲夜さんに頼んだメニューは、

「チーズ入り半熟オムレツ」

「温野菜のサラダ（トマト抜き）」

「白米」

「コンソメスープ」

まあ内容はよくある朝食に出るものだ。だが大変なのはこのメニューは今ここでお嬢さんが言ったものを作る、「紅魔館の住人分」全てを咲夜さん一人で。こんなに大きな

館だ、作る量も多いし片付ける食器類の数は考えたくも無いな。

しかも朝食を作り終えた後には館内の掃除や洗濯、妖精メイドの指導にお嬢さんのわがままを聞いたりした後、また人数分の食事これを毎日3食分ひとりでごなしているらしい。そんな事をずっと幻想郷に来てから続けている。

「でもあれだけの食事を30分程度で作れるって人間技じゃないぞ。流石の俺もそんな量だったらもつと時間がかかる」

「それは間違いです。咲夜さんは自身の能力で時間を操れます。いつも料理を作る時も時間を止めて人数分をどうにか作っているはずなので、実際は3時間程かかっているでしょう」

昨日のあれはは時間を止めて動いていたのか。それならいきなり背後に回られたのも納得がいく。

「なるほどね、このままじゃ咲夜さんが過労死でも起こしそうだから、せめて食事の用意

だけでも負担を減らす為に俺が連れてこられたと」

「そういう事です。どうか少しの間だけでも手伝っていただけませんか？」

これだけ頼まれたら断りづらいし、あのメイドさんから何か新しいレシピでも教えてもらえれば儲け物だし……。

「わかった、そのかわり条件をお嬢さんに3つ程飲んでもらおうかな。なんの対価も無しにやるほど人は良くないんでね」

「ある程度の事でしたらお嬢さまは気にしないと思います。私からも伺っておきますね」

お嬢さんの食事が終わり食堂から出ようとしていた所を呼び止める。

「ここまで頼まれたら断りづらいし、どうにか頑張るか！」

先に俺が過勞死しないといいが………